

京都大学学生生活白書

平成23年度《学生生活実態調査》のまとめ—概要—



京都大学学務部

目次

A. 調査に協力してくれた人たち	1
B. 学内施設の利用	1
C. 入学と学業	2
D. 課外活動（サークル・ボランティア活動）	5
E. 旅行について	7
F. 健康・悩み等	7
G. 進路（進学・就職）	9
H. 家庭状況	10
I. 住居と通学	12
J. 生活費の状況	14
K. アルバイト	15
L. 食事	17
M. 耐久消費財について	18
N. その他	19

※本書では調査結果を小数点第2位で四捨五入し、小数点第1位までの表記としています（一部を除く）。したがってグラフの数字を合計しても100.0%にならない場合や合計欄の数字にならない場合があります。また、過去の白書から引用した数字は小数点第1位で四捨五入されているものもあります。

※文中の数字は無回答、設問非該当を除いている場合がありますので、必ずしも表・グラフの数字とは一致しません。

※本書では調査内容の一部見直しに伴い、従来の白書と調査結果の掲載順序を変更しています。

A. 調査に協力してくれた人たち

京都大学の学部と大学院に在籍する学生を対象に学生生活の実態を把握し、キャンパス全般の環境整備に役立てるため、昭和28年以降『学生生活実態調査』を実施しています。

すべての京大生のうち学部学生（以下学部生）・大学院学生（以下院生）からそれぞれ7人に1人の割合で、2,924人を無作為に抽出し、平成23年10月にアンケートを実施したところ、1,593人（回収率54.5%）から回答が寄せられました。調査に協力して貴重な回答と意見をいただいた学生諸君に感謝いたします。

所属学部・研究科毎の回答者割合

学部・大学院	学部学生	修士課程	博士課程	専門職学位課程	合計
総合人間学部	48				48
文学部・文学研究科	44	24	9		77
教育学部・教育学研究科	19	8	6		33
法学部・法学研究科	102	1	5		108
経済学部・経済学研究科	52	7	6		65
理学部・理学研究科	76	83	58		217
医学部・医学研究科	95	15	64	6	180
薬学部・薬学研究科	45	9	11		65
工学部・工学研究科	284	124	33		441
農学部・農学研究科	23	79	27		129
人間・環境学研究科		22	4		26
エネルギー科学研究科		34	6		40
アジア・アフリカ地域研究研究科			12		12
情報学研究科		34	6		40
生命科学研究科		22	15		37
地球環境学堂・学舎		5	4		9
法科大学院				35	35
公共政策教育部				8	8
経営管理教育部				12	12
合計	788 (42.6%)	473 (79.6%)	271 (69.7%)	61 (67.8%)	1593 (54.5%)

()内の数字は回収率を表す。アジア・アフリカ地域研究研究科は5年一貫のため博士課程に算入。

B. 学内施設の利用



生協施設への依存と要望

京大生がもっとも頻繁に活用する学内施設は、生協購買部と生協食堂である。生協購買部については《ほとんど毎日利用する》と《週に2～3回程度利用する》を合わせると、7割近くに及び、この傾向は以前の調査から一貫している。今回初めて設問に加えた生協食堂の利用も《週に2～3回程度利用する》以上の頻度で利用する者が6割あり、この割合は宇治および桂キャンパスでは8割にも及ぶ。一方、生協食堂は平均満足度において他の学内施設に比べて高いわけではなく、自由記述からは調査年において行われた中央食堂の耐震改修や狭隘な南部生協に対する不満が現れている。各キャンパスに最近増えているカフェやレストランの利用度は、学部生・院生ともに高くないが、満足度としては高い傾向にある。学生の要望としては安価な食事が快適に提供されることを望んでいるが、時にはカフェやレストランで食事を楽しみたい傾向も見とれる。



満足度の高い附属図書館

附属図書館については、《ほとんど毎日利用する》と《週に2～3回程度利用する》を合わせたものは、全体では2割を超える程度であるが、学部生と専門職では3割以上あり、前回調査と比べると附属図書館の利用頻度は上昇している。他方、修士および博士、あるいは吉田キャンパス以外の学生では1割以下であり、学部生と専門職学生のための学習場所としての利用を反映していると思われる。附属図書館の満足度は4.06と前回調査に続き極めて高く、開館時間の延長や24時間利用できる学習室24などのサービス向上が功を奏していると考えられる。

各学部の図書館利用については、《ほとんど毎日利用する》と《週に2～3回程度利用する》を合わせたものは、2割程度であるが、ここでも専門職では、4割を超える。

総合体育館、総合博物館などの施設については著しく利用者は少ないが、総合体育館や運動グラウンドについてはクラブ活動で占有されているが、一般の学生も使用できるようにしてほしいという要望も少なから

で見られる（自由記述編参照）。

保健診療所は必要に応じて活用されており，《年に数回利用する》という回答が2割以上を占める。キャリアサポートセンターの利用は全体で12.2%と前回の17.6%から低下しているが、修士では前回並みの28.5%が利用しており、他の課程の倍以上となっている。他の学内施設も含めて満足度は総じて3～4の範囲にあり、一定の満足は得られているようである。

施設毎の利用頻度と平均満足度

(%)

区 分	ほとんど毎日	週に2～3回程度	月に2～3回程度	年に数回程度	全く利用しない	存在を知らない	平均満足度
附属図書館（総合図書館）	6.6	16.8	29.9	34.1	12.1	0.5	4.06
学部等の図書館・図書室・資料室	4.3	14.9	29.8	31.3	18.6	1.0	3.83
学術情報メディアセンター南館	0.4	5.8	15.2	35.0	41.0	2.6	3.48
総合博物館	0.0	0.3	1.0	25.5	67.0	6.0	3.79
健康科学センター	0.0	0.1	0.2	1.7	39.7	58.1	3.54
カウンセリングセンター	0.0	0.1	0.6	2.4	59.4	37.3	3.69
保健診療所	0.1	0.1	0.5	26.2	53.1	19.7	3.63
キャリアサポートセンター	0.0	0.5	2.7	9.0	59.9	27.6	3.28
女性研究者支援センター	0.0	0.0	0.3	0.7	59.3	39.1	3.71
総合体育館	2.1	4.0	6.0	15.3	68.0	4.5	3.56
運動グラウンド	2.8	3.0	3.0	9.3	77.2	0.1	3.12
スポーツ指導・相談室	0.0	0.1	0.2	0.5	50.2	48.8	3.47
クラブ・サークル部室	10.8	8.2	4.6	4.8	57.9	13.5	3.33
生協購買部	30.6	38.3	21.5	7.1	2.1	0.4	3.73
生協食堂	29.5	31.0	22.9	12.6	3.6	0.3	3.59
カンフォーラ（吉田）	0.2	1.6	10.0	50.0	35.8	2.2	3.82
ラ・トゥール（吉田）	0.1	0.2	0.7	9.7	76.1	13.0	3.85
タリーズコーヒー（吉田）	0.1	1.1	8.6	21.1	59.4	9.6	3.79
カフェレストランきはだ（宇治）	0.0	0.1	0.2	2.1	30.5	66.7	3.60
ハーブムーンガーデン（桂）	0.4	0.9	1.9	2.3	26.8	67.4	2.96
ラ・コリヌ（桂）	0.0	0.2	0.5	2.9	27.4	68.6	3.65
カフェテリアセレネ（桂）	3.0	0.9	1.2	1.7	24.7	68.1	3.38
カフェアルテ（桂）	0.5	0.5	1.2	2.4	26.3	68.9	3.22
ペーカリーカフェリユヌ（桂）	0.1	1.1	2.7	4.1	25.0	66.5	3.99

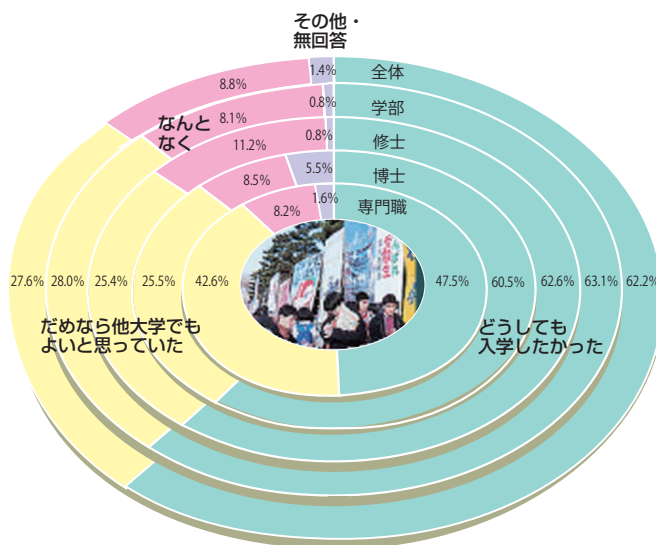
C. 入学と学業



6割以上がどうしても入学したかった

〈どうしても入学したかった〉と回答した京大生は全体で62.2%と、前回とほぼ同じである。内訳は、学部63.1%、修士62.6%、博士60.5%と課程の進行とともにやや低下している。専門職では47.5%であり、学部以外は、前回の調査よりもやや低い。〈だめなら他の大学でもよいと思っていた〉割合は、全体で27.6%であり、前回よりもやや上昇した。この内訳は専門職が42.6%と高く、他は学部28.0%、修士25.4%、博士25.5%であり、いずれも前回よりもやや高い。修士、博士、専門職では、大学院の選択肢が増えていることを反映しているようだ。

京都大学大学院・学部への入学願望度



入学の動機は、〈伝統や雰囲気にあこがれていた〉が学部の第1位で23.2%となっており、前回の19.4%よりも上昇した。前は学部の場合〈社会的評価が高い〉が20.2%で1位であったが、今回は17.1%とやや低下した。修士と博士では、〈スタッフ・設備が優れている〉が前回同様1位であり、それぞれ18.2%、

30.3%と前回よりも高い。また専門職では、前は<社会的評価が高い>が1位であったが、今回は<将来の就職を考えて>が27.9%で1位になっている。他に多く選ばれていたのは、学部では<社会的評価>や<先生や友人の勧め>、修士と博士では<就職前に深い専門的知識を身につけたかった>、専門職では<社会的評価が高い>である。学部では京大ブランド、大学院では専門性、専門職では就職と入学動機が課程別に分化してきた点が今回の調査結果の特徴である。

学部・学科等を選択する際に重視した2点については、学部生も大学院生も<自分の惹かれた学問分野であること>を第1位としているが、学部の場合80.7%であるのに対して、修士は88.2%と高い。博士の場合は、42.1%が<最先端の学問が学べる>を選んでおり、専門職では57.4%が<将来希望する就職に必須>を1位にしている。入学目的が課程別に分化している。

入学時に将来の進路を<決めていた>学生は、<ある程度決めていた>を含めると全体の61.5%であり、学部57.8%、修士62.8%、博士70.1%、専門職88.5%となっている。専門職で<決めていた>が、前回(83.7%)よりもさらに高い。



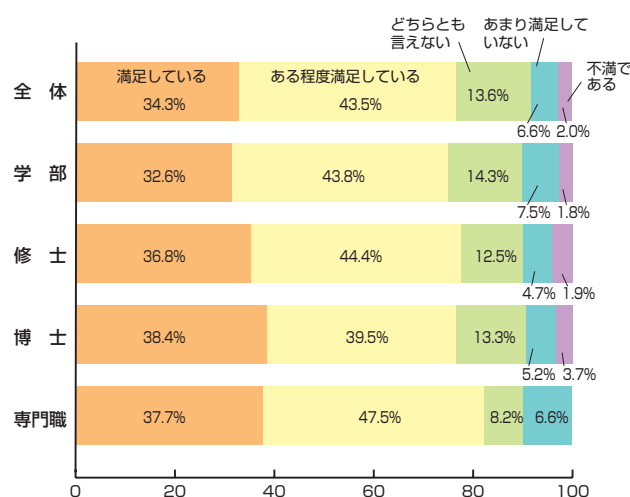
8 割弱が満足 カリキュラムの消化困難がやや増える

在籍している学部・学科・専攻等への満足度については、<満足・ある程度満足>が全体では77.8%である。各課程では学部76.4%、修士81.0%、博士77.9%、専門職85.2%となっており、それぞれ前回は上回っている。とくに専門職の満足度が高まっている。

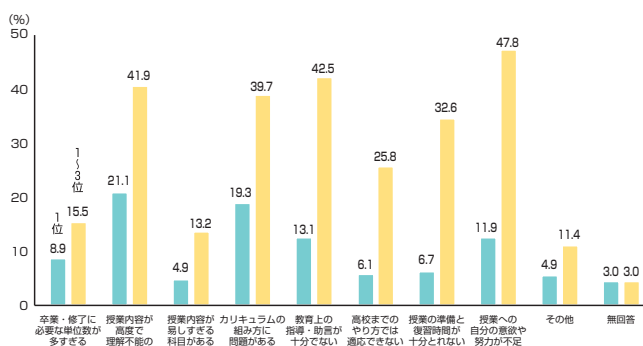
学部生に対する「現行のカリキュラムに満足していますか」の問いでは、<満足・ある程度満足>が53.9%（前回56.7%）、<不満・やや不満>が21.5%（前回20.3%）である。また「現行のカリキュラムは消化できますか」の問いでは、<できる・ある程度できる>が77.6%（前回83.0%）、<困難・やや困難>が9.7%（前回6.8%）となっている。前回と大きな差はないのだが、やや満足度が低下して、カリキュラムの消化困難がやや上昇している点に注意する必要がある。現行カリキュラムへの改善要望では、<授業の内容が高度で理解不能の科目がある>を第1位にする者が21.1%と一番高い。また第1位～第3位の合計で<授業の準備と復習時間が十分とれない>が32.6%あり、前回の21%よりも高くなっている。このことから、カリキュラムの消化困難が増加傾向にある。

講義室・実験室などの教育環境に対する<満足・ある程度満足>は、全体で75.2%であり、課程別でもほぼ同様である。一方<不満>と表明する者は1～2%と低いので全体として満足度は高い。

現在在籍している研究科等・学部に対する満足度



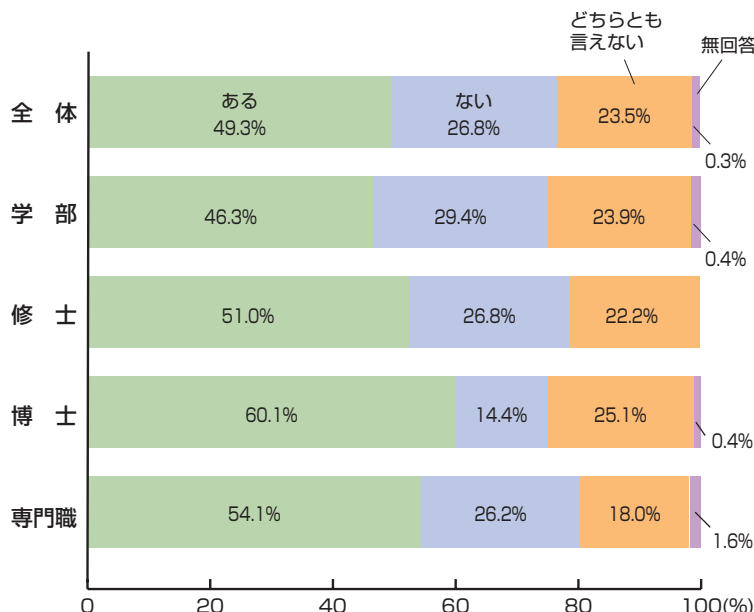
現行カリキュラムへの改善・要望等（学部学生のみ）



今回の調査では、大学からの情報発信媒体として何を希望するかを尋ねている。結果は課程別にやや異なり、学部は63.8%が<クラス>を希望しているが、修士では55.8%、博士では60.5%、専門職では44.3%が<個人メールアドレスへの配信>を希望している。また第2位は、学部が<携帯メール>、修士が<クラス>、博士と専門職が<大学ホームページ>というように、課程別に希望が異なっている。

海外留学の希望・関心について、全体としては<希望・関心あり>が49.3%であり、課程別では博士の<希望・関心あり>が60.1%と高い。<希望・関心なし>の理由については、<語学力の不安>と<金銭的な不安>がどの課程でも高い。自由記述をみると、学部では「興味がない」が多い。

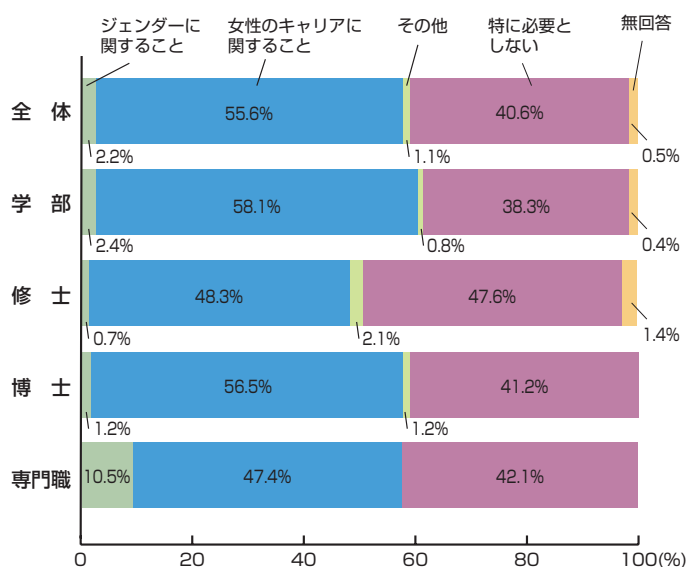
海外留学への希望、関心の有無



女子学生の5割以上、女性のキャリアについて学びたい

今回の調査では、女子学生を対象として、「開講してほしい授業科目・講演会・セミナー」を尋ねている。全体では、女子学生の55.6%が<女性のキャリアに関すること>を希望しており、学部生では58.1%となっている。さらに今回の調査では、「女子学生であることで勉学・研究において何らかの区別を感じたこと」を自由記述するよう求めている。学部、修士、博士、専門職のそれぞれの学生から、結婚・出産と研究とを両立させることの困難について、また研究を継続する上で出産・育児がハンディになるのではという不安が述べられていた。

女子学生向けに開講してほしい授業・講演会・セミナー



D. 課外活動（サークル・ボランティア活動）

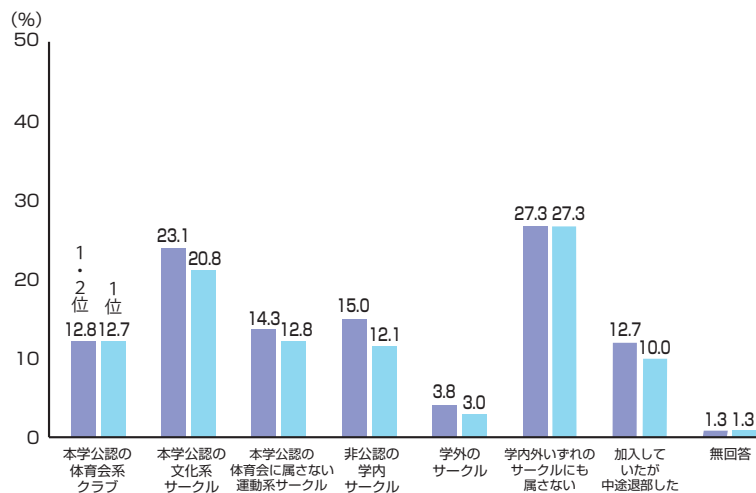


課外活動は有意義

何らかのクラブ、サークルに加入している学部学生は約78%に達し、34%は運動系のサークルに属している。クラブ・サークルへの参加理由は、「活動内容が好きだから」が61%で最も多く、「友人を得るため」が12.5%、「団体生活に興味があるから」が7.3%と続く。

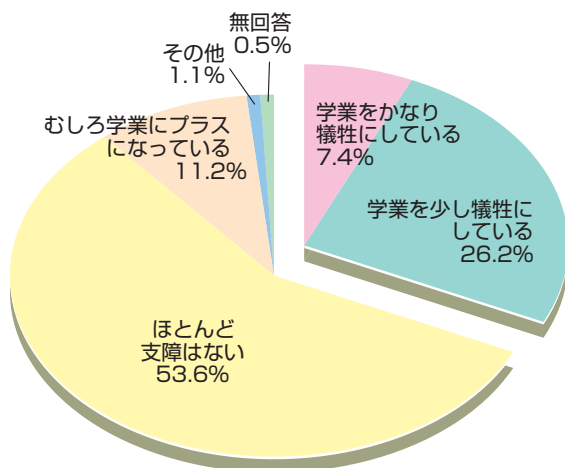
学内外のいずれのサークルにも属さない学生は、修士では55%、博士では79%、専門職学生では70%に増加する。加入していない理由は、学部学生では「活動に拘束されたくない」が最も多いが、修士、博士、専門職学生では「時間がない」、「学業の妨げになる」が最も多い。

現在加入しているクラブ・サークル

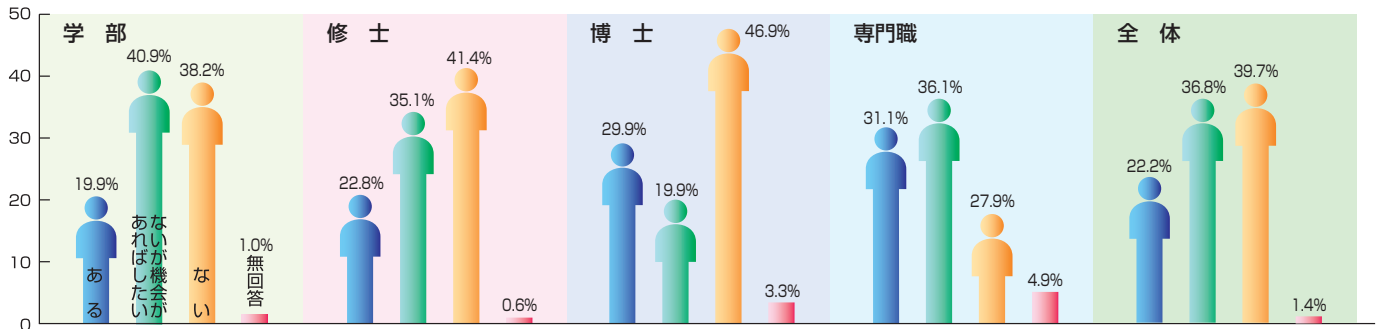


クラブ・サークルでの1週間あたりの活動時間は、学部学生では10時間以上が33%で最も多いが、修士、博士、専門職学生では大多数が1週間で2時間未満である。学業を多少なりとも犠牲にしていると答えた学部学生は39%近くに達するが、修士、博士では「ほとんど支障はない」「むしろプラスになっている」と感じる割合が80%以上を占める。

クラブ・サークルと学業との関係 (クラブ・サークルへの加入者のみ)

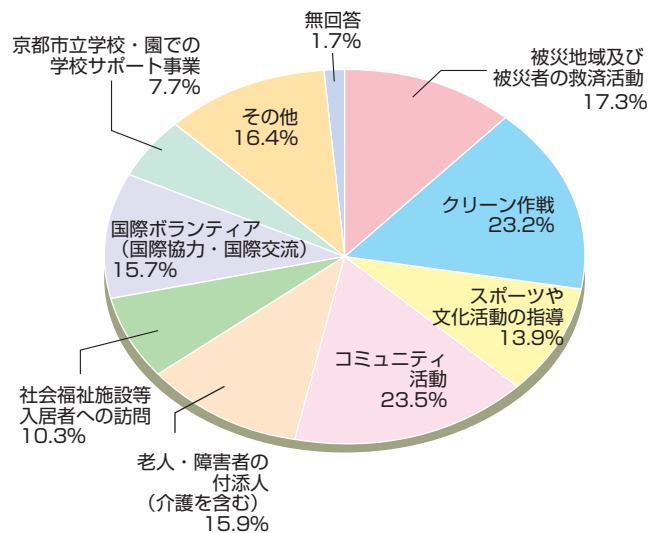


ボランティア活動の経験の有無

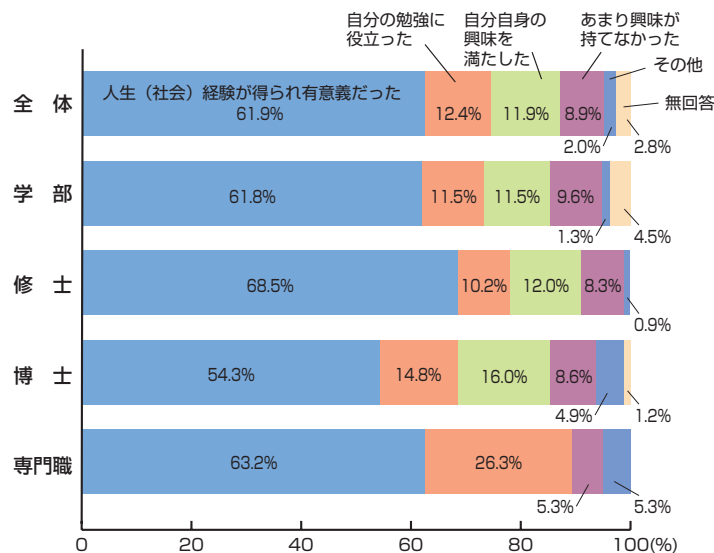


ボランティア情報の入手経路は、「友人・知人の紹介」と「学内外のサークル」を合わせて67%を占める。ボランティア活動の内容は「クリーン作戦」(19%)が最も多く、「被災地域及び被災者の救援活動」(16%)、「老人・障害者の付添い人等(含・介護)」(12%)と続く。修士では、「国際ボランティア(国際協力・国際交流)」と答えた学生が「クリーン作戦」に次いで多く、専門職学生では「老人・障害者の付添い人等(含・介護)」が最も多かった。ボランティア活動を経験した学生の86%が、自分にとって有意義であったと感じている。

ボランティア活動の内容 (ボランティア活動をした人のみ)



ボランティア活動を経験しての感想 (ボランティア活動をした人のみ)



E. 旅行について



海外旅行先はアジアが最多

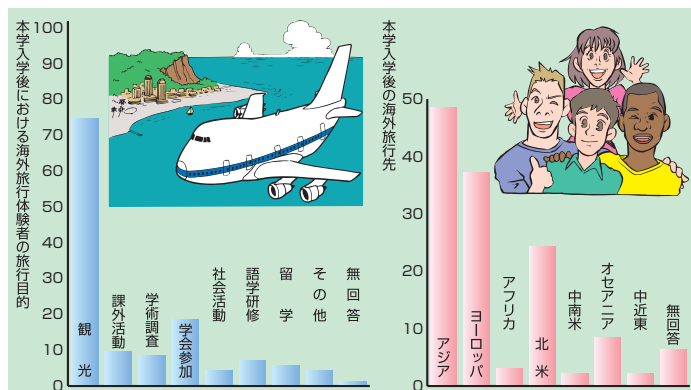
23年度前期に一泊以上の国内旅行をした回数は、一回が24%、二回が22%、三回が14%、四回が5%、五回以上が12%で、学部、修士、博士で大きな差は見られなかった。その一方、無回答学生が23%もあり、つまらないことを聞くなどという意思表示と取れる。

入学後の海外旅行経験者は、学部学生で35%、修士で51%、博士で64%、専門職で33%であった。2年前の調査に比較すると、修士、博士では微増しているが、学部学生では4%減少している。

海外旅行の目的は、学部学生では観光が79%と圧倒的で、6%の語学研修がそれに続く。修士では観光が64%に減少し、学会参加が14%に増加する。博士になると学会参加が45%で首位になり、2位観光は32%に減少する。専門職学生の旅行目的は、学部学生の傾向に近かった。

海外旅行先は、アジア41%、ヨーロッパ29%、北米16%、オセアニア5%の順であり、前回調査から大きな変化は見られない。博士についてみると、相対的に北米、ヨーロッパの比率が高くなり、アジアと同程度である。

本学入学後の海外旅行体験者の渡航目的と海外旅行先



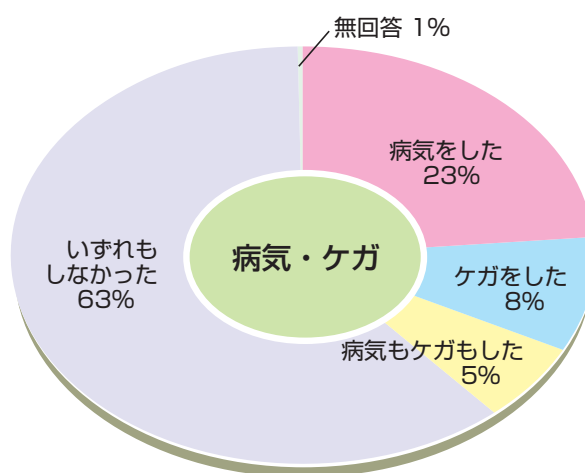
F. 健康・悩み等



4割弱が傷病を経験。主な原因は不摂生と心労

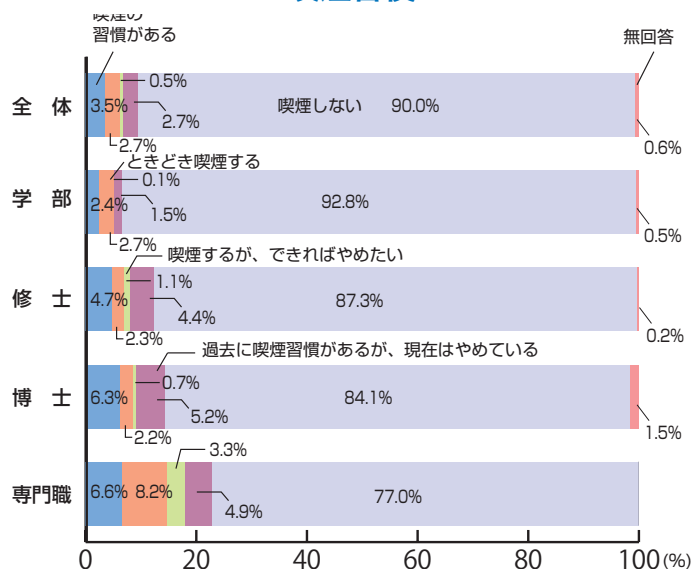
この半年間（平成23年4～9月）に傷病をした京大生は、＜病気＞が23.5%、＜けが＞が7.6%、＜両方した＞が5.4%、＜いずれもしなかった＞が63.0%である。傷病の原因は、全体としては、＜不摂生＞が36.9%、＜心労＞が28.3%、＜スポーツ＞が22.7%となっているが、博士学生において＜心労＞が41.4%に、専門職学生において＜不摂生＞が44.0%、＜過度の勉強＞が40.0%に上っていることが、特徴的である。治療日数は、10日未満の者が3分の2を占めるが、なかには1カ月を超える者も15.2%見られる。治療方法は、医療機関への通院が49.9%、自宅療養（市販薬の服用も含む）が44.6%、入院は3.4%であった。

平成23年4月～9月の間に 病気や怪我をした人



次に、健康維持のためにどのようなことを行っているかとの問い（複数回答）については、＜食事に気を付けている＞が51.8%で最も多く、ついで＜スポーツ＞が38.9%、＜規則正しい生活＞が34.9%の順であった。喫煙については、現在喫煙していない者が92.7%である。博士よりも修士、修士よりも学部生において、喫煙率が低い。また、2年前のデータと比べても確実に喫煙率は減少していて、健康増進の観点から望ましい傾向であると言える。

喫煙習慣



保険への加入状況に関しては、学生教育研究災害保険傷害保険への加入率が78.6%に上り、その他、学生総合共済（46.4%）、学研災付帯賠償責任保険（20.6%）等への加入が見られる。

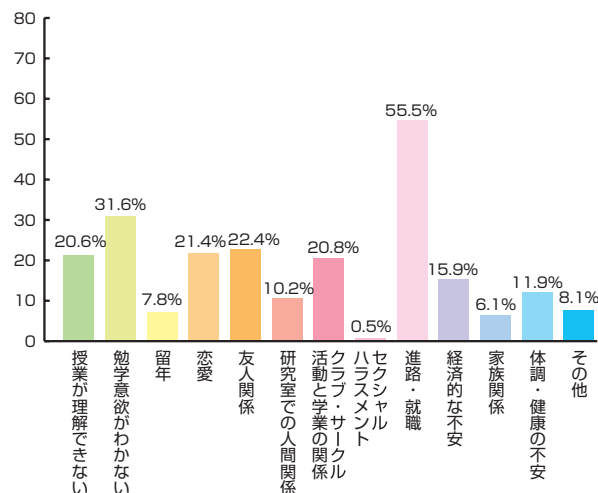


悩みの原因は、学生・院生ともに＜進路・就職＞がトップ

悩みについては、69.4%の学生が入学以降悩みを感じている一方、30.3%の学生は悩みがないと答えている。悩みの種類（複数回答）は、＜進路・就職＞が55.5%で最も多く、次いで＜勉学意欲がわからない＞31.6%、＜友人関係＞22.4%、＜恋愛＞21.4%、＜授業が理解できない＞20.6%の順となっている。博士学生では、＜進路・就職＞の71.9%について、＜研究室での人間関係＞が34.1%になっているのが、特徴的である。

悩みの相談相手としては、＜学内の友人・知人＞、次いで＜学外の友人・知人＞と＜家族＞となっている。一方で、＜誰もいない＞との回答が7.8%見られた。

京大生の悩み



G. 進路（進学・就職）



学部生の進学希望者は58%、就職希望者がやや増加 就職活動への不安を抱く女子学生の声

学部生の58.0%が進学を、39.7%が就職を希望している。前回21年度の調査時と比べると、就職希望が数パーセント増加している。修士学生は、24.8%は進学を、71.7%が就職を希望している。

希望の職業については、企業等の研究職が22.6%で最も多く、次いで、大学・官公庁の教育・研究職が20.9%、医師・弁護士等の専門職が14.9%、技術職が12.6%の順となっている。

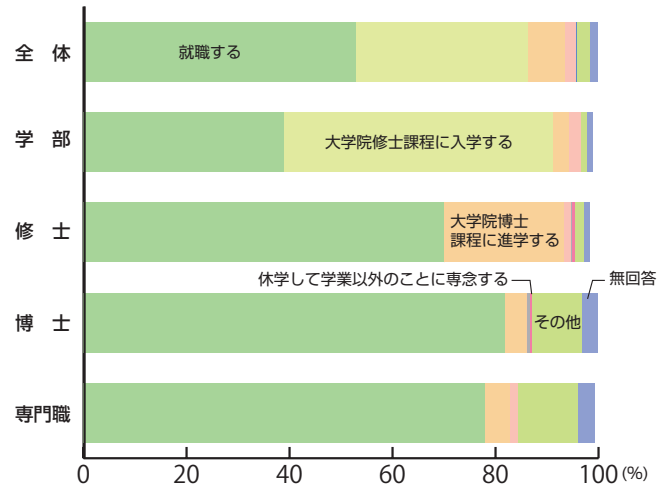
職業選択の理由（複数回答）としては、＜自分の特技・能力や専門知識が活かせる＞が61.4%で最も多く、次いで＜自分自身の成長が期待できる＞が45.2%、＜社会に貢献できる＞が43.3%、＜安定した生活が保障される＞が34.5%、＜十分な収入が期待できる＞が30.6%の順となっている。

理想の職業を選ぶ場合に重視すること（複数回答）としては、＜やりがいがある＞が60.8%で最も多く、次いで＜給料がよい＞が42.0%、＜職場の人間関係がよい＞が38.0%、＜能力が発揮できる＞が37.6%の順となっている。

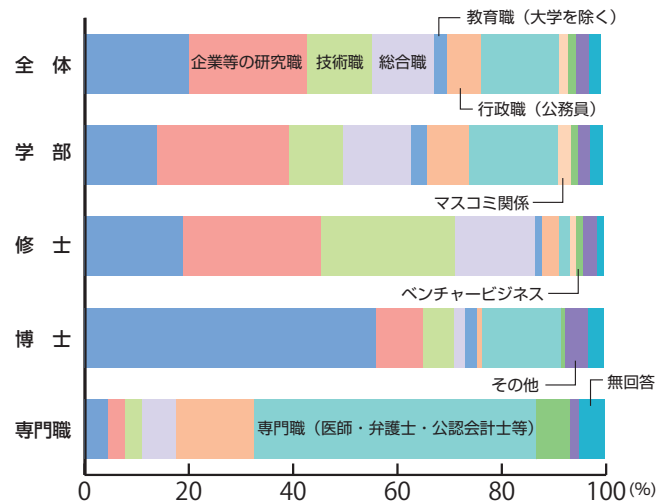
就職を希望する地域は、＜京阪神＞が37.6%、＜地域を問わない＞が34.8%、＜首都圏＞が13.0%の順であった。

今回新たに女子学生のみを対象として、＜女子学生であることで、就職活動において何らかの区別を感じたことがあるか＞、その内容を自由に記述するようという設問を加えた。その結果、「男女とも採用すると就職サイトでは書いていたのに、後日、女性は採用しないと通告された」という経験や、「女子ということで、早期退職を見据えた採用になるのではないか」「理系なので、不利にならないか不安だ」というように、就職活動への不安を抱く女子学生の声が多く寄せられた。一方で、「企業が女性の採用を促進しているため、女子であることが評価される場合がある」、「結婚後も仕事を続けるかについて聞かれたが、特に区別は感じられなかった」という声なども一部見られた。

京大生の進路希望



将来希望する職種



H. 家庭状況

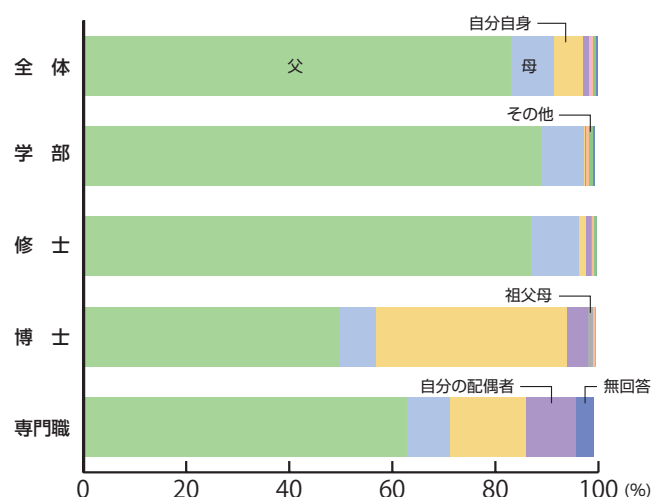


学部・修士と博士学生では家庭の収入分布に大きな差異

学生の家庭所在地は近畿地方が過半数で、学部学生（以下、学部生）で54.2%、修士課程大学院生（修士院生）で52.4%、博士課程大学院生（博士院生）で59.8%、専門職大学院生（専門職院生）で57.4%である。博士院生と専門職院生で高い率になっているのは、独立生計を営む割合が増えるからである。家庭所在地の第二位は東海地方、第三位は関東地方である。前回調査に比べ、近畿以外の割合が微増している。家庭の人数は、いずれの階層においても4名が最多（約40%）で、次いで5名である。両親の健在率は高く、専門職院生で特に顕著である。既婚率は、学部生で0.3%、修士院生で1.1%、博士院生で14.8%、専門職院生でも14.8%である。また、子供が居る割合は、それぞれ0.4%、1.3%、9.6%、14.8%未満である。

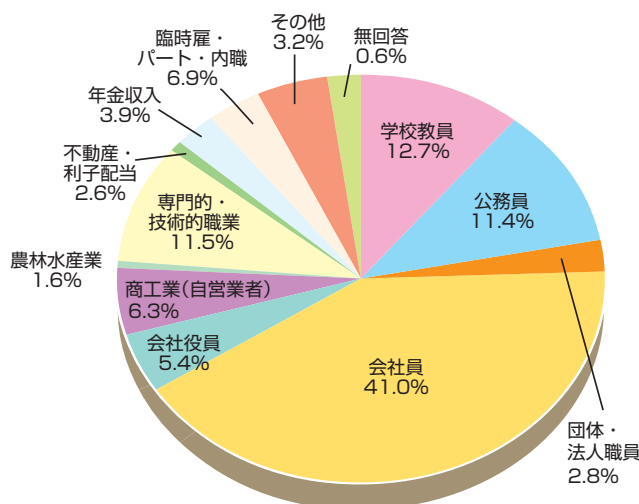
主たる家計支持者が両親のいずれかである割合は、学部生で97.9%、修士院生で96.6%、博士院生で57.6%、専門職院生で72.1%であり、学生本人または配偶者が支持者である割合は、それぞれ0.4%、2.4%、41%、24.6%である（右図参照）。

主な家計支持者（最多収入者）

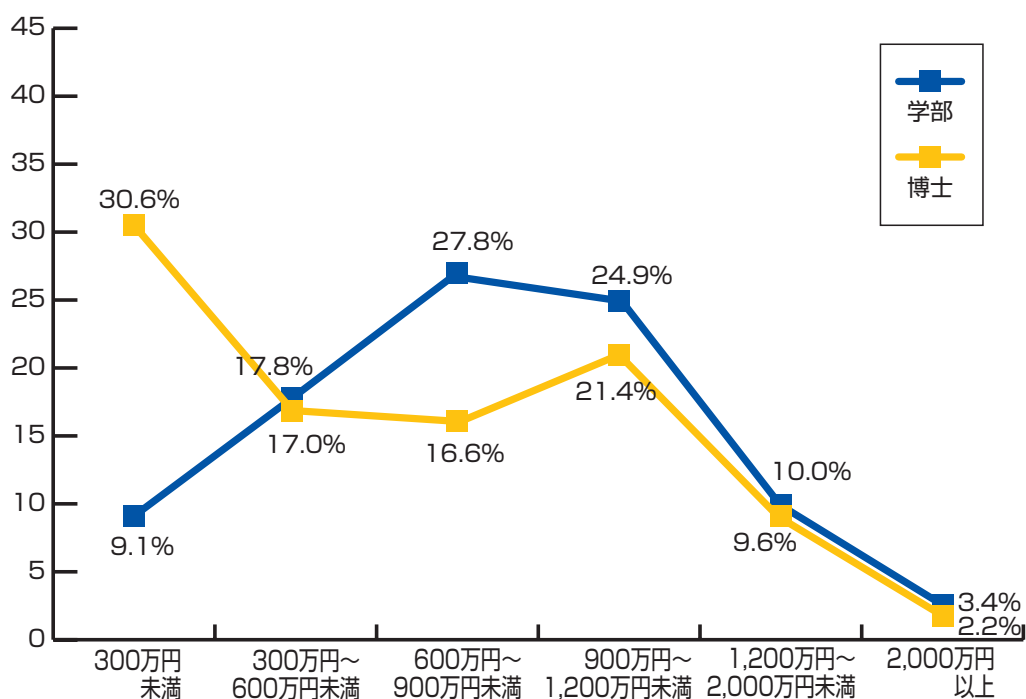


また、主たる家計支持者が会社員である割合は、学部生および修士院生では約45%と高いが博士院生では約20%に激減する。専門職院生ではその中間の約30%である。博士院生で激減する傾向は、会社役員でも同様である。一方、主たる家計支持者が教員である割合は、学部生、修士院生、博士院生の間で顕著な差異が見られなかった（いずれも10%台前半）が、専門職院生においてはその半分以下である（下図は学生全体の統計）。

主な家計支持者の職業、収入源



家庭の年収（学部学生・博士課程学生）



学部生の家庭の収入分布（上図）は600～900万円にピーク（30%弱）が見られる。これを、例えば東京大学での調査結果と比べると、中・低所得層が多く、京都大学がより広い階層からの学生を受け入れていると言える。修士院生の家庭収入は学部生とほぼ同様であるが、博士院生では（上図）、最頻値（30%強）が300万円未満で、第二ピークが900～1200万円に現れる二極分離型である。専門職院生でも、顕著ではないが、博士院生に近い傾向が見られる。学部生・修士院生では親の収入が反映されているのに対し、博士院生では学生本人の収入も関わっている。具体的には、300万円未満の学生の約3/4が自立しており、その約2/3が日本学術振興会の奨励金等を生活の糧にしている。収入の第二ピークは600～900万円にあり、主として医療行為に因るものである。これと、博士院生の親の収入が平均として学部生・修士院生より多いことが重なり、全体の第二ピークが900～1200万円に現れている。

前回調査に比べて、平均収入は微増傾向にあるが、学部生においては300万円未満の家庭が増加しており、授業料免除などの厚生施策の拡充が望まれる。

1. 住居と通学



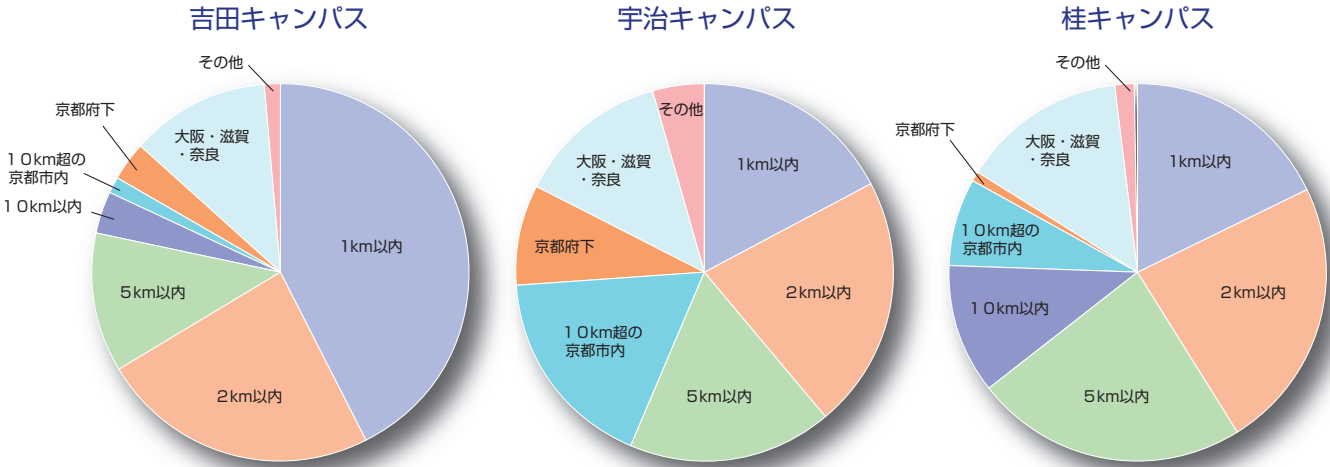
4割近い学生がキャンパスから1km以内に居住

自宅通学している学生の割合は、学部学生（以下、学部生）で30.8%、修士課程大学院生（修士院生）で23.5%、博士課程大学院生（博士院生）で53.1%、専門職大学院生（専門職院生）で49.2%である。博士院生と専門職院生で高い率になっているのは、独立生計を営む割合が増えるからである。通学キャンパスは殆どが吉田キャンパスであるが、修士院生と博士院生で、桂キャンパス（それぞれ22.6%、9.2%）と宇治キャンパス（それぞれ4.9%、3.7%）が少し多くなっている。

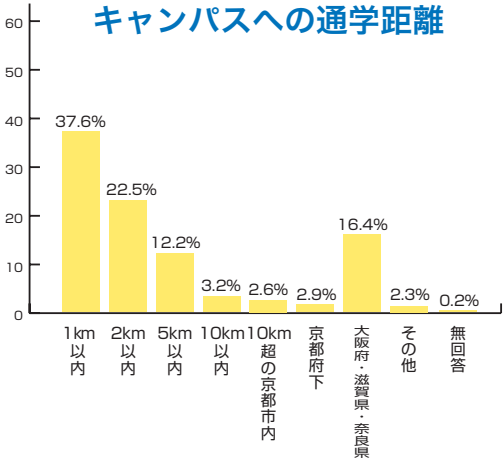
多くの学生がキャンパスから1km以内に居住しており、首都圏とは異なる良好な通学環境といえる。具体的には、学部生で39.1%、修士院生で35.5%、博士院生で35.8%、専門職院生で27.9%が、通学距離1km以内である。次に多いのが、博士院生では2~5kmで、それ以外では1~2kmである。一方、隣接府県の大阪・奈良・滋賀からの通学者の割合は、学部生で19.2%、修士院生で12.7%、博士院生で8.5%、専門職院生で19.7%である（下図「キャンパスへの通学距離」は学生全体の統計）。

宇治・桂キャンパスへの通学距離は、吉田キャンパスに比べてやや遠い。修士院生に着目して比較を行うと、吉田では全体の約40%が1km以内であるのに対し、宇治・桂ではほぼ同割合が0~2kmである。さらに吉田では全体の約25%が1~2kmであるのに対し、宇治・桂ではほぼ同割合が2~5kmである。即ち、後者の通学距離は前者のほぼ倍に広がっている。一方、他府県からの通学者の割合は、キャンパスに依らず15%前後である。

キャンパス別通学距離



キャンパスへの通学距離



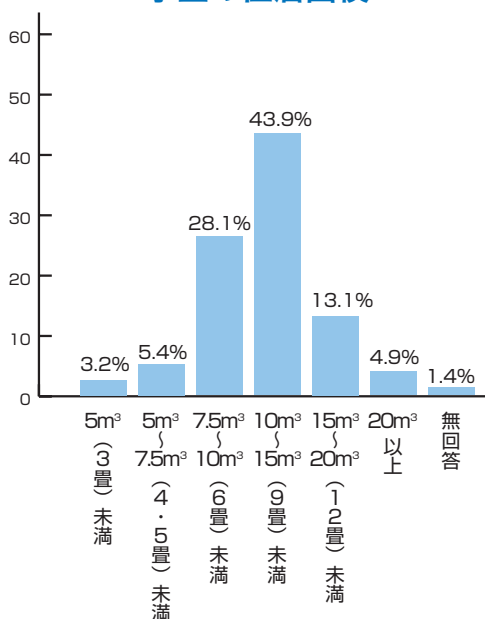
自宅外通学者の約9割はアパートまたはマンションに暮らしている。一方、京都大学の学生寮に入居している割合は、学部生で2.9%、修士院生で1.7%、博士院生で0.8%、専門職院生で6.5%である。自宅外通学している学部生、修士院生、博士院生者では一人暮らしが90%以上であるが、専門職院生では、84%である。二人暮らしが増えるからである。

学生の住居面積は、いずれの階層においても10～15㎡（9畳未満）が最頻値で、次いで7.5～10㎡（6畳未満）である（右図は学生全体の統計）。

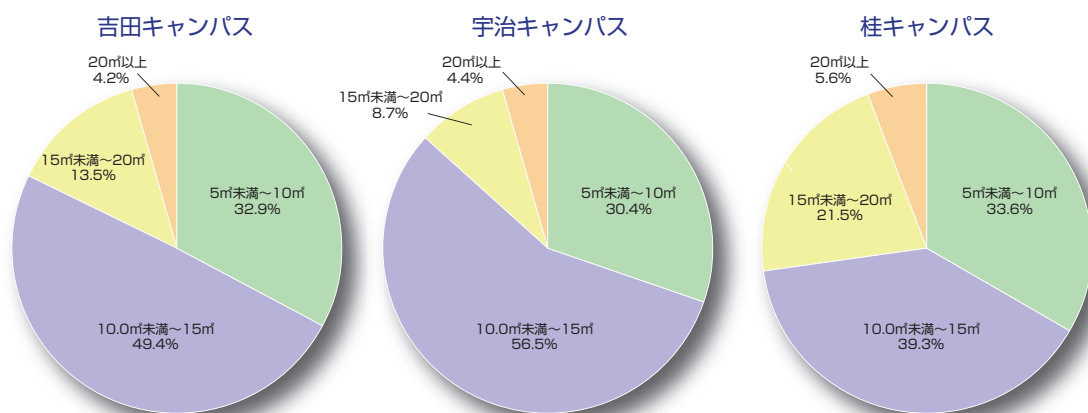
修士院生に着目してキャンパス別に比較すると、いずれにおいても約2/3が10㎡以上であるが、その内訳として15㎡以上である割合が、宇治、吉田、桂の順に高くなっている。

通学時の交通手段は、キャンパス近くの居住者が多いことを反映して、いずれの階層においても自転車か1位である。鉄道利用については、学部生で27.3%、修士院生で20.5%、博士院生で14.8%、専門職院生で32.8%と階層依存性が見られる。これと関連して、通学所要時間は、いずれの階層においても15分未満が1位であるが、修士院生（下図左）と博士院生では時間と共にほぼ単調減少であるのに対し、学部生（下図中央）と専門職院生（下図右）では90分前後に小ピークが見られる。

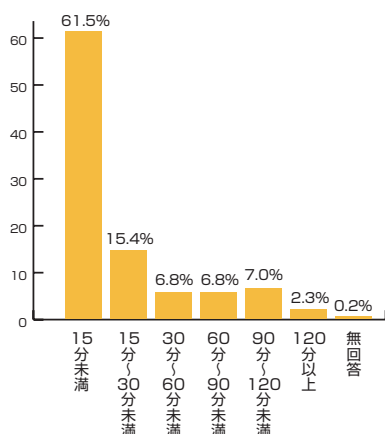
学生の住居面積



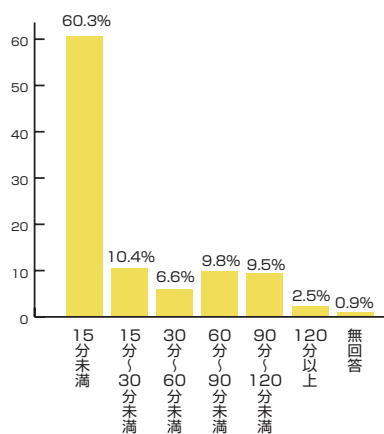
キャンパス別住居面積



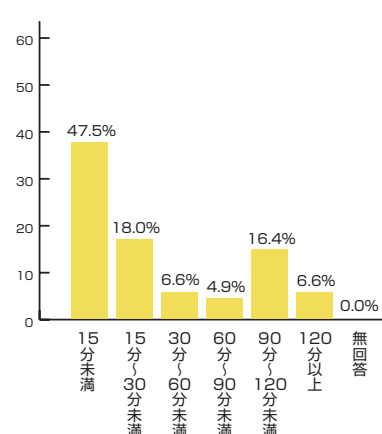
通学所要時間（片道）【修士学生】



通学所要時間（片道）【学部学生】



通学所要時間（片道）【専門職学生】



J. 生活費の状況



収入の部

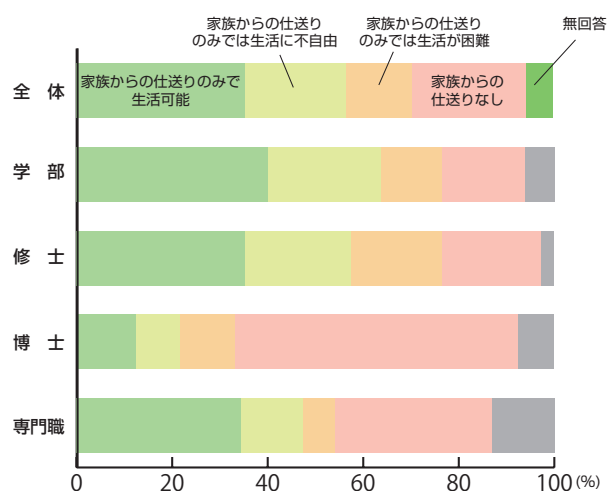
京大生の平均月収は、前回調査と比較し、学部生は、ほぼ変化はなかったが、修士課程で 12,690 円減、博士課程で 8,370 円増、専門職大学院で 1,160 円増となった。平均月収のうち《家庭から》の仕送りは、学部で 1,560 円の減であったものの、修士で 2,470 円、博士で 7,290 円、専門職で 3,630 円の増となっている。他方、《奨学金・研究奨励金》は、学部で 1,140 円の増であったが、修士で 12,720 円、博士で 13,490 円、専門職で 3,300 円の減となっている。《アルバイト》収入は、学部ではほぼ変化はなかったが、修士で 3,970 円の減、博士で 19,290 円の増、専門職で 2,970 円の減となっている。また、「家庭からの仕送りによる学生生活の実行性」の調査項目で、《家庭からの仕送りのみでは生活が困難》および《家庭からの仕送りのみでは生活に不自由》と回答した学生の割合が、合計で 34.8%に達した。大学院における奨学金の減は、有利子制の導入や免除制度の廃止が影響しているものと思われる。



支出の部

京大生の 1 ヶ月の平均支出額は、前回調査と比較し、学部生と専門職ではほぼ変化はなかったが、修士で 12,690 円減、博士で 8,370 円増となった。毎日の生活に必要な基礎支出費《食費、家賃、光熱水道費》が全体の支出に占める割合は 55.1%で、前回調査とほとんど差異がない。勉学に学部生で 7,230 円、修士で 8,390 円、博士で 20,920 円、専門職で 20,240 円支出し、四者の間に差がみられた。また、《剰余金・預貯金》は、それぞれ 14,100 円、12,590 円、47,380 円、11,940 円で、四者の間に差がみられた。博士課程での剰余金・預貯金の額が大きいことは、決して裕福さを示すものではなく、むしろ将来への不安が主な要因であると考えられるべきであろう。支出のうち、最も増やしたい項目として、《衣服・嗜好品・日用雑貨》と《勉学費》をあげ、最も減らしたい項目として、《食費（含・外食費）》があげられている。

家庭からの仕送りと勉強との関係 (%)



家族からの仕送りによる学生生活の実効性

1カ月の平均収入金額

(単位：千円)

区分	家庭から	奨学金・研究奨励金	アルバイト	その他	収入合計
全体	56.05	32.49	34.40	3.73	126.66
学部	60.96	17.72	27.57	0.96	107.21
修士	60.00	37.84	18.20	3.53	119.56
博士	26.54	90.18	97.85	9.32	223.88
専門職	56.50	51.59	6.31	40.52	154.93

1カ月の平均支出金額

(単位：千円)

区分	食費 (含・外食費)	住居費 (家賃・光熱水料)	衣服・嗜好品・ 日用雑貨	勉学費(教科書・参考書・ 文具・交通費等)	課外活動・ 教養娯楽費	情報・通信費	医療費 (含・健康保険の掛金)	その他	剰余金・預貯金	支出合計
全体	28.09	41.63	11.93	9.66	8.86	4.16	1.96	2.25	18.13	126.66
学部	24.33	37.26	10.86	7.23	8.83	3.17	0.83	0.66	14.04	107.21
修士	29.03	44.61	11.05	8.39	6.68	4.59	1.04	1.58	12.59	119.56
博士	43.28	56.57	18.13	20.92	12.77	7.96	7.49	9.38	47.38	223.88
専門職	33.65	46.86	13.31	20.24	7.04	5.2	7.66	9.03	11.94	154.93

K. アルバイト



半数の学生が定期的にアルバイトを実施

《アルバイトはしなかった》という学生の割合は全体で 28.5%であるが、学部では 23.9%であるのに対して、博士課程では 38.0%であり、昨年比 7.9%の減となっている。なお、専門職学位課程では前年度同様《アルバイトはしなかった》学生の割合が 68.9%と多い。

職種（1・2位）については、学部では、《学習塾講師》が 35.6%、《飲食店》が 32.4%、《家庭教師》が 18.5%の順、修士課程では、《教育研究補助 TA・RA》が 43.4%、《学習塾講師》が 21.1%、《家庭教師》が 12.2%の順となり、博士課程では、《教育研究補助 TA・RA》が 61.9%と大半を占める結果となった。大学院における TA・RA 制度拡充の影響が数値として現れているが、さらなる制度的整備が必要なのは言うまでもない。

月平均労働時間については、学生全体の 30.3%が 40 時間以上労働しており、生活のかかなりの割合をアルバイトが占めていることがわかる。

アルバイトの紹介先（1・2位）は、学部では《友人・知人・先輩》の 38.7%と《紹介誌・新聞広告・チラシ》の 34.8%が主となっているが、修士課程では《友人・知人・先輩》が 38.7%、《教員》が 30%の順となり、研究室活動の影響が現れている。さらに博士課程では 59.5%と《教員》が紹介する《教育研究補助》の割合が増えていることがわかる。

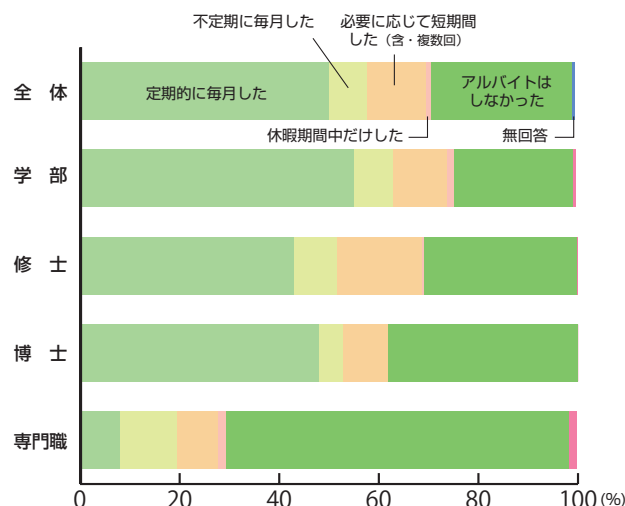
アルバイト収入の使途（1・2位）については、学部では《教養娯楽費》が 54.1%、《衣食住費》が 48.4%、《勉学費》が 10.8%、修士課程では《衣食住費》が 58.4%、《教養娯楽費》が 44%、《勉学費》が 21.4%、博士課程では《衣食住費》が 69.6%、《勉学費》が 46.4%、《教養娯楽費》が 19.6%となっており、前項の「生活費の状況」における支出内訳と同様、学部と大学院の差というよりは、学部・修士と博士の差が目立つ結果となった。

アルバイトと学業の関係について、《ほとんど支障はなかった》が 全体で 61.6%であるが、これは 4 割弱が《ある程度支障があった》または《大きな支障があった》であることを示すものであり、好ましい状況であるとはいえない。

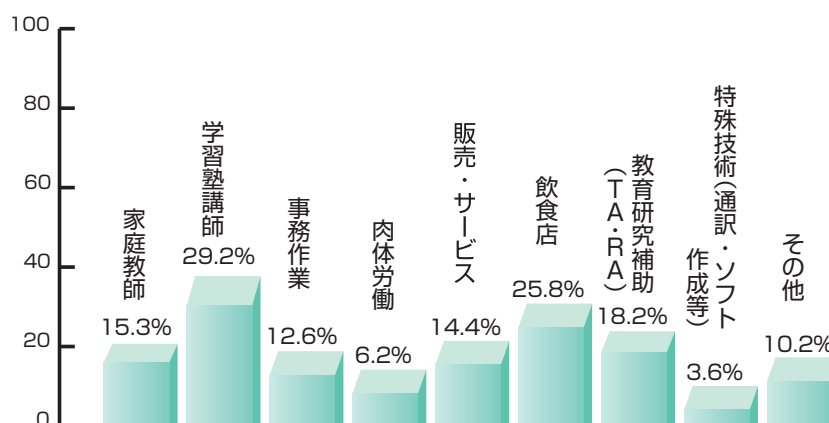
アルバイトをしなかった理由について、《やりたかったが時間的余裕がなかった》が 51.4%と半数以上を占めている。また、《経済的に不要》が全体で 19.5%となり、こちらは前回より減少している。

アルバイト経験の感想について、全体の 69.2%が《人生（社会）経験が得られて有意義であった》としているのは、前回と同様の傾向であるが、学業への支障を考えると必ずしも好ましいとはいえないだろう。

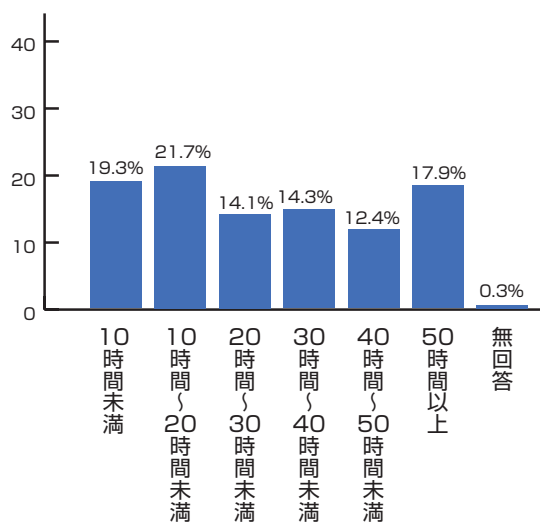
アルバイト実施頻度（平成 23 年 4 月以降）



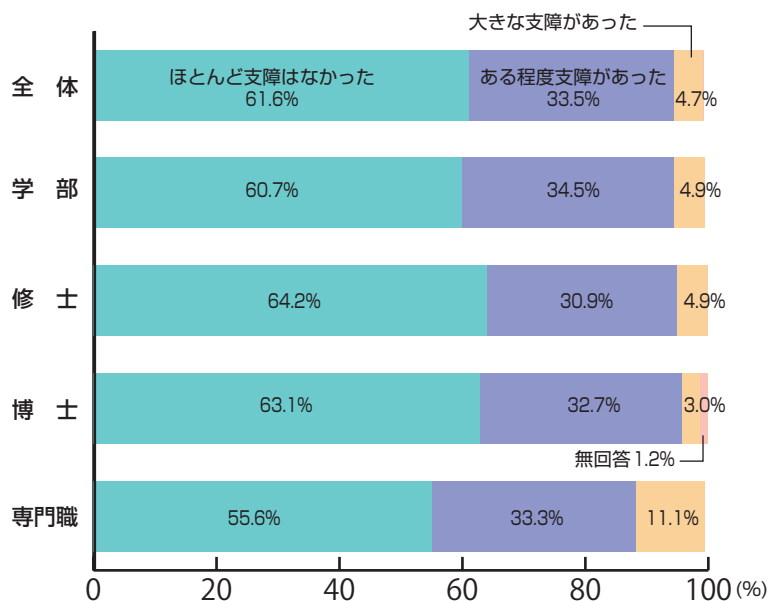
主なアルバイトの種類（平成23年4月以降のアルバイト実施者のみ）



アルバイト一ヶ月あたりの平均就労時間（含・通勤時間） （平成23年4月以降のアルバイト実施者のみ）



アルバイトによる学業への影響（平成23年4月以降のアルバイト実施者のみ）



L. 食事

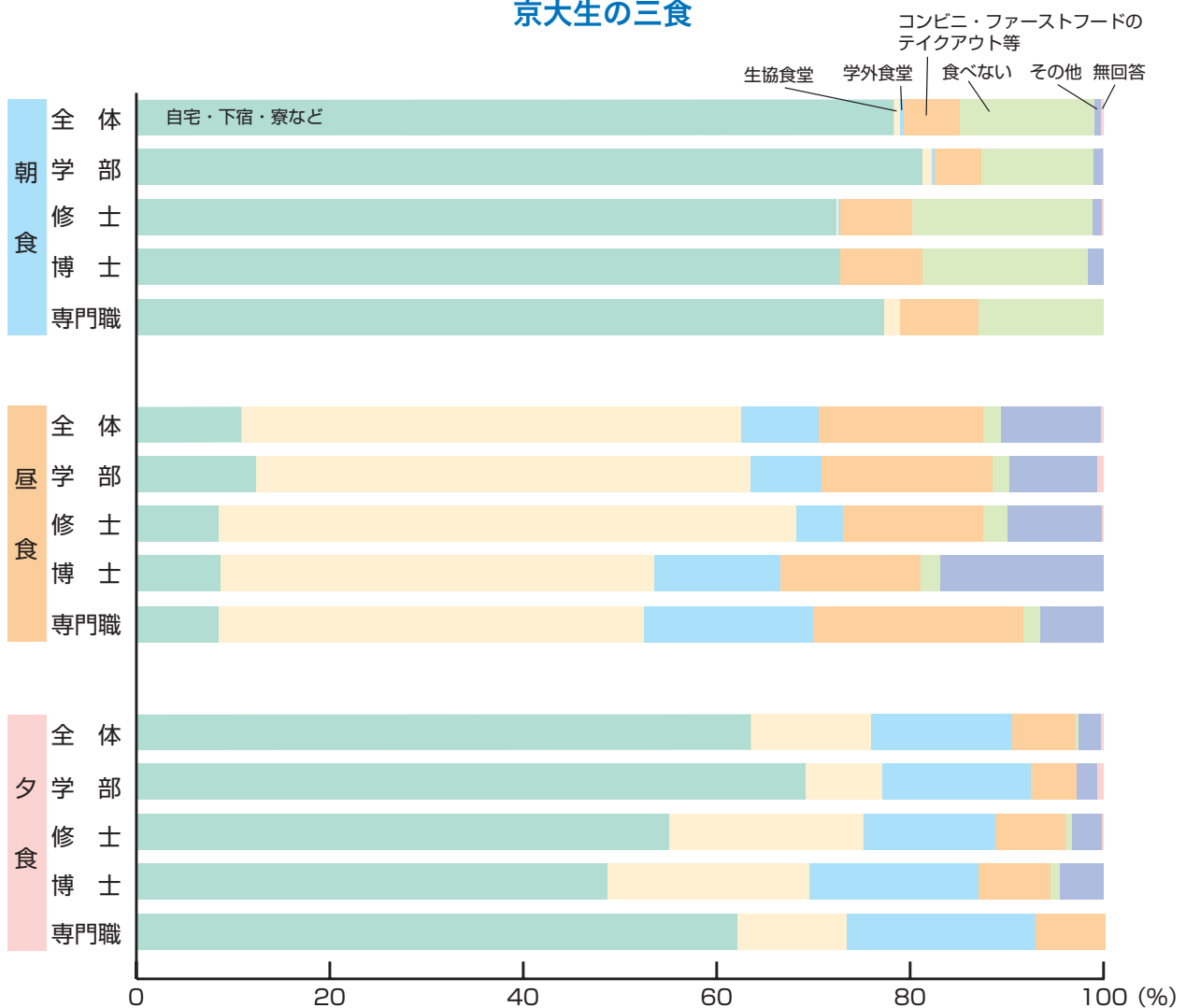


朝食は自宅、昼食は生協食堂、夕食は自宅で取るのが典型的パターン

朝食は主として《住居（自宅、下宿、寮）》で取っている学生が77.9%である。一方で、《朝食抜き》は14%に上る。また昼食は、《生協食堂》が52%、《コンビニ・ファーストフードのテイクアウト》が17%に上る。夕食は、《住居》が63.4%、《生協食堂》が12.4%、《学外食堂》が15.3%となっている。生協食堂を使う頻度は、《毎日1食》が26.2%、《毎日2食》が8.5%、《週に2-3回》が30.8%、《殆ど利用しない》が31.1%となっている。利用しないことの最大の理由は、《混雑していること》で36.6%である。前年度と比べて生協食堂の利用率が下がっているのは、吉田地区において工学部8号館の耐震改修工事に伴って中央食堂が長期休業したためであると思われる。また、百万遍近辺のファーストフード店が増加しており、それらを利用する学生が漸増している。



京大生の三食



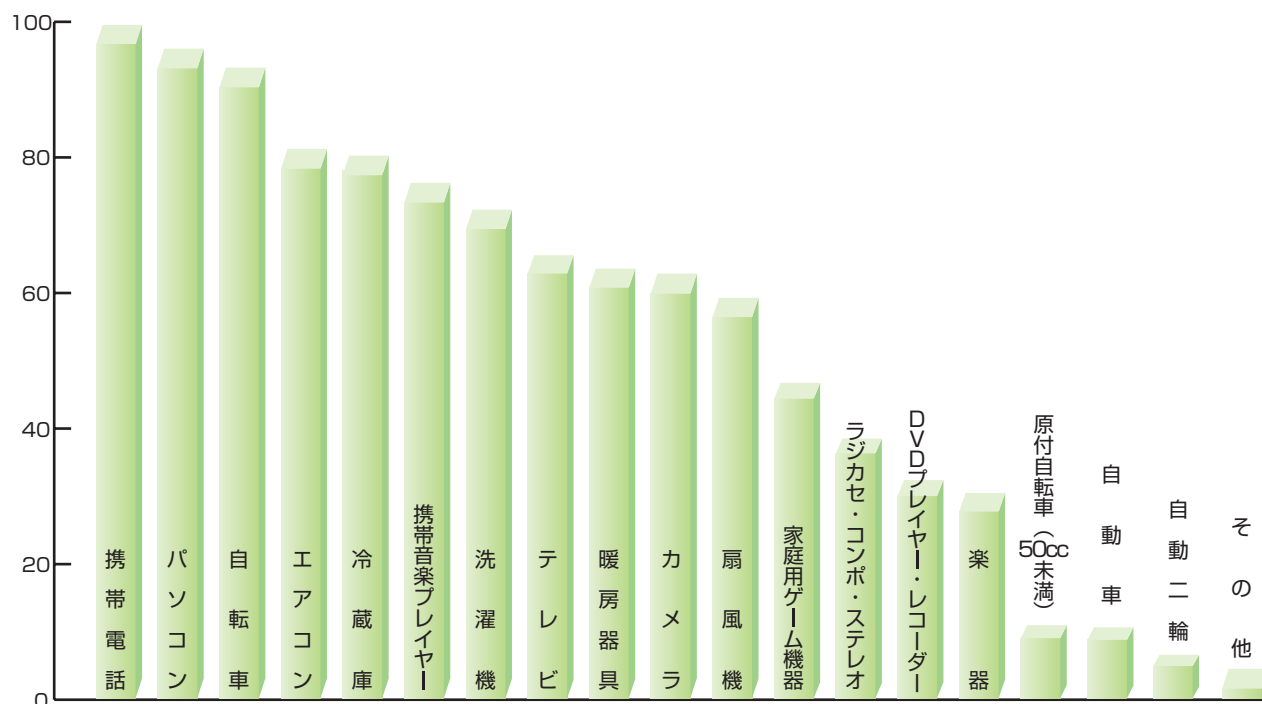
M. 耐久消費財について



携帯電話、パソコン、自転車が三種の神器

京大生の所有率の高い耐久消費財は、携帯電話 96%、パソコン 95%、自転車 89%が上位を占め、さしずめ 3 種の神器とみなせる。携帯音楽プレイヤーの保有比率は 76%で、生活に必要なエアコン 78%、冷蔵庫 76%に迫る勢いである。博士、修士、学部と課程が下がるにつれて、携帯音楽プレイヤーの保有比率が上昇している。

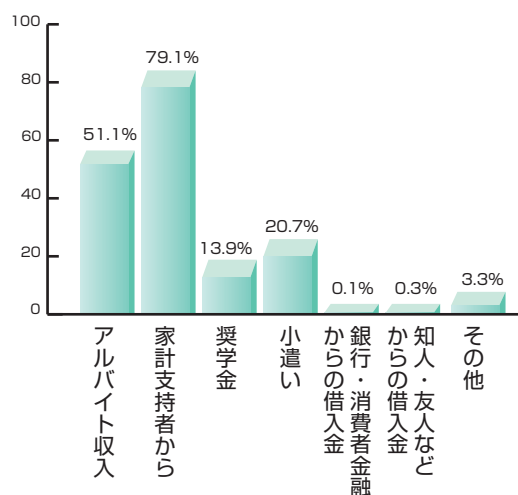
自身が所有している耐久消費財（配偶者との共有を含む）



これらの耐久消費財の購入費用は、家計支持者からが 62%で最も多く、アルバイト収入が 28%でそれに次ぐ。アルバイト収入で購入する割合は、専門職 18%、学部 24%、修士 33%、博士 42%と、課程を追って高くなる。

耐久消費財の購入費用の出所

パソコン所有者の 96%が自宅からインターネット接続を行っている。自宅 PC からのインターネットの使用時間は 2 時間未満が 56%であるが、3 時間以上の学生も 24%いる。自宅で閲覧するサイトは、学部学生では「趣味、レジャー関係」が 61%で首位を占め、「学習・研究」は 31%に過ぎないが、「学習・研究」が修士では 37%、博士では 58%、専門職では 66%に増加する。



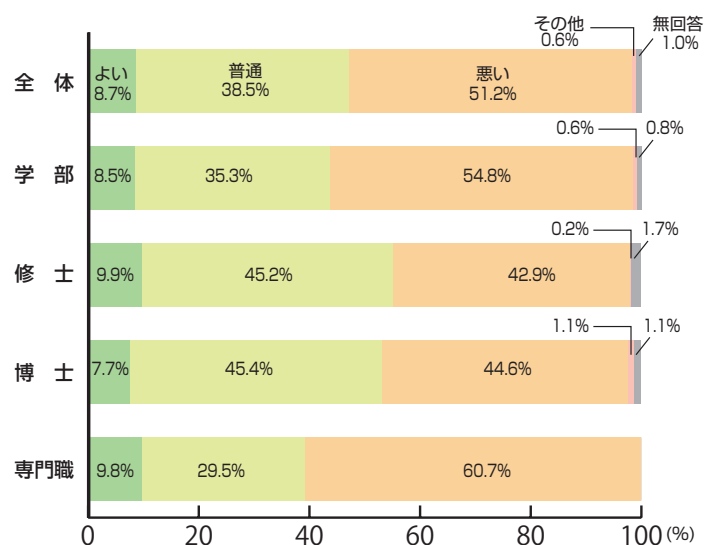
N. その他



5割以上が学内外の交通マナーが悪いと評価

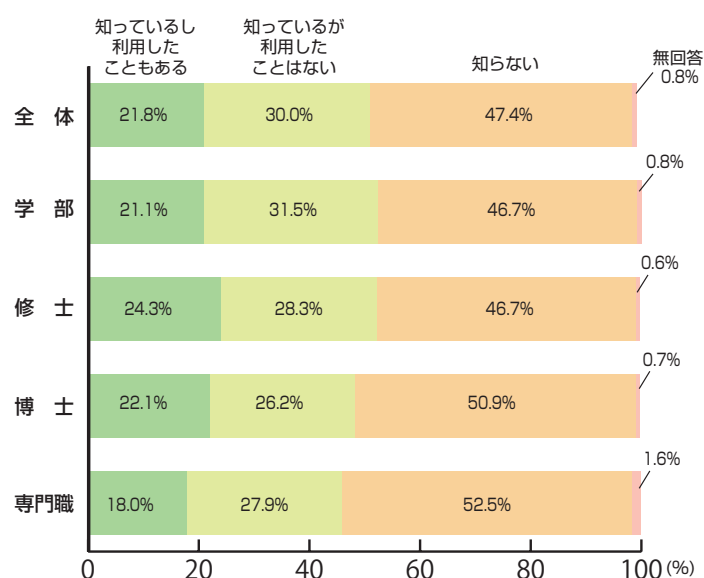
今回の調査でも「本学学生のキャンパス内外における交通マナー」について学生自身がどう思っているのかを尋ねている。＜良い＞が8.7%、＜普通＞が38.5%、＜悪い＞が51.2%であり、半数以上が本学学生の交通マナーが悪いと考えている。専門職では60.7%、学部の54.8%が＜悪い＞と回答している。また調査では「マナーの改善について効果的な方法、あるいは希望」を自由記述で尋ねているが、駐輪場の充実、自転車用道路の整備を求める声が多く、マナー向上のために、すぐに効果の上がるような方法の提案は見当たらなかった。

本学学生の学内外における交通マナーの評価



国立博物館・美術館や茶道資料館の利用に特典があることについて、全体の51.8%が知っており、そのうち約4割が実際利用したことがあると回答しており、前回調査とほぼ同じ結果であった。

国立博物館・美術館や茶道資料館の利用特典の認知度

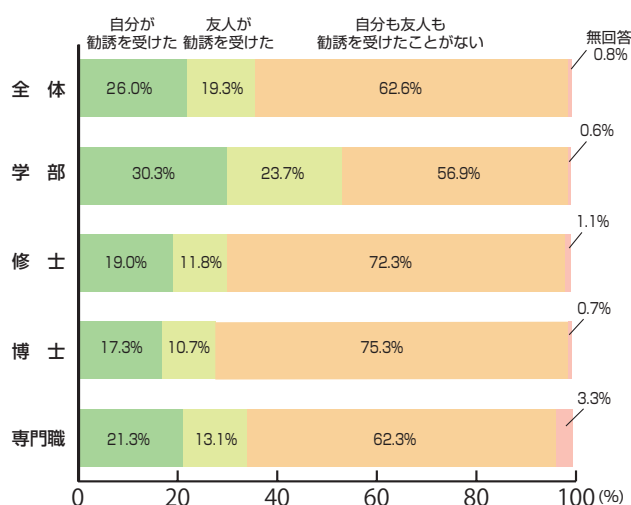




4分の1以上が宗教等の勧誘を受けた

今回の調査では「学内での宗教等の勧誘を受けた経験」を尋ねている。全体では26.0%が「自分が勧誘を受けた」、19.3%が「友人が受けた」と答えており、学部では「自分が勧誘を受けた」が30.3%となっている。勧誘方法としては、自由記述によれば、「アンケートへ協力してください」「ボランティアをしませんか」「サークルに入りませんか」などが比較的多い。

学内で宗教等の勧誘を受けた経験の有無



4割以上が自転車置き場の改善を求めている

大学に特に要望することについて順不同で5つまで尋ねたところ、全体で最も多かったのが「自転車置き場の改善」の40.1%で、以下は順に「自由に利用できるスペースの拡充」が36.1%、「授業方法の工夫・改善」が35.5%、「国の奨学金制度の拡充・充実」が27.0%である。

学部生では、「自転車置き場の改善・充実」「自由に利用できるスペースの拡充」「授業方法の工夫・改善」の希望が多く、前回調査よりもそれぞれの割合は高くなっている。「LAN環境の改善」についても、前回調査では10.7%であったが、今回は19.3%が希望している。修士と博士では「国の奨学金制度の拡充・充実」を希望する割合が32.3%と45.4%と高いが、前回調査よりもやや低下している。前回に比べて希望が高まったのは、「福利厚生施設の充実」である。今回の調査で学部の19.2%、修士の32.3%、博士の28.4%、専門職の21.3%が「福利厚生施設の充実」を希望しており、前回（それぞれ5.2%、10.6%、9.7%、8.2%）よりもかなり高い。「自転車置き場」とともに「施設」の充実が求められている。

大学への要望・期待

(%)

	学部	修士	博士	専門職
カリキュラムの改革	28.6	13.5	15.5	16.4
授業方法の工夫・改善	41.5	24.5	22.5	39.3
授業関連施設の充実	13.7	9.3	9.6	16.4
課外活動施設の充実	16.1	12.1	8.1	4.9
福利厚生施設の充実（生協・寮など）	19.2	30.7	28.4	21.3
国の奨学金制度の拡充・充実	20.9	32.3	45.4	36.1
カウンセリングや相談体制の充実	2.3	4.0	6.3	3.3
図書館の充実	21.8	18.4	21.4	31.1
就職対策の充実	17.5	23.9	9.2	14.8
トイレの改善	13.8	10.6	8.9	4.9
学生への連絡方法の改善	16.5	13.5	12.9	6.6
自転車置き場の改善	42.9	36.8	31.4	42.6
体育施設の開放	11.7	11.0	7.4	11.5
LAN環境の改善	19.3	23.0	21.8	16.4
学生自治の尊重	4.9	5.1	3.0	1.6
自由に利用できるスペースの拡充	40.6	31.5	22.5	32.8
各種施設の利用時間の延長	26.4	19.2	18.1	29.5
教職員の学生への態度	6.9	9.1	8.1	11.5
その他	4.1	6.6	9.6	6.6

学生生活実態調査の利用について

学生生活実態調査の利用については、直ぐに調査結果を反映できる事項とできない事項がありますが、長期的には大学としての施策立案に本調査結果を参考にしています。

- 例 1. 図書館の現行の利用時間は、本調査において利用時間の延長を希望する声が多いものを反映した結果です。
- 例 2. トイレの改修についても、改修希望の声が多いことを反映して順次改修しています。
- 例 3. その他アクションプラン等においても学生生活全般の環境整備が調査結果を踏まえて実施・検討されています（課外活動施設新営、桂の厚生施設等）
- 例 4. 授業料免除で貸与奨学金や家計支持者死亡の保険金を所得に算入しない等の制度改善や民間奨学金のHP掲載等による情報提供の推進に努めています。



京都大学学生生活白書

平成23年度《学生生活実態調査》のまとめ—概要—

平成24年7月 発行

編集 平成23年度学生生活実態調査委員会
委員長 八尾 誠 (理学研究科教授)
副委員長 岩井 八郎 (教育学研究科教授)
委員 金子 周司 (薬学研究科教授)
白井 泰治 (工学研究科教授)
廣野 由美子 (人間・環境学研究科教授)
水谷 雅彦 (文学研究科教授)

発行 京都大学学務部
〒606-8501 京都市左京区吉田本町